

善隣

No.485 通巻752

2017年（平成29年）11月1日発行（毎月1日発行）

2017 11





長寿祝賀会（9月14日、新橋亭新館）



平成29年8月24日 北緯50度ボベジノ（古屯）にある『樺太・千島戦没者慰霊碑』にて

善 隣 目 次 2017年11月号

特集

- 映画「葛根廟事件の証言」が制作されて ……………大島満吉 2
- 映画「葛根廟事件の証言」完成に添えて ……………田上龍一 7

公開講演会記録

- 中国を生きる女性たちのいま
—女性の社会進出を支えた「阿姨(アーイー)」という存在 ……姫田小夏 11
- 歴史の転換は我々に何をかたりかけるか？
—2015年ノーベル賞作家スヴェトラナ・アレクシェーヴィッチの
最新作『セカンドハンドの時代』をめぐって ……杉山秀子 18

- コラム** 〈腰折れ文〉三、樺太旅行 ……………渡邊澄子 25

会員彼是

- 花岡事件ご存知ですか？ ……………伊大知重男 26

- 中国ウォッチング** ……………編・訳 上松玲子 28

- 陶々俳壇** ……………馬場由紀子選／佐藤若杉 30

- 常任委員会報告 …………… 31

- 協会通信・会員だより・同好会だより …………… 32

- みんなの写真館** …………… 32

- 2017年11月の行事予定 …………… 33

- ◆原稿・写真など大募集◆ …… 31

善 隣 第485号 通巻752号

2017(平成29)年11月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03(3573)3051

FAX 03(3573)1783

発行人 矢野一彌

印刷所 (旬)ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

特集

映画「葛根廟事件の証言」 が制作されて

興安街命日会 代表 大島満吉



映画「葛根廟事件の証言」より

2017年5月、望んでも叶えられないであろう、と思われた、ある事件を取り上げた映画が完成した。製作してくれたのは戦争体験を持たない若手映像作家の田上龍一さんである。スポンサーなしで映画を作るなんてとても考えられない。それが2年の歳月をかけてとうとう完成させたのだ。葛根廟事件とは、1945

年8月、参戦したソ連軍（当時）の侵攻を受けた旧満洲国興安総省興安街（現内モンゴル自治区ウランホト）の住民約1300人が避難途中の葛根廟付近でソ連軍の戦車隊に襲撃され約1000人が命を落とし、翌年の日本への帰国は一割しか帰れなかったという事件である。何故、ソ連軍の戦車隊が民間人の団体を襲ったのか、その時に日本の軍隊はどうしていたのか、満洲国軍はどう動いたのか、地元の中国人あるいはモンゴル人等はどう見ていたのか、こうした謎の解明は研究者でないとできないが、こんな事件があったこと、その事実だけでも記録として残してくれるなら関係者としてこんな嬉しいことはない。

証言しているのは11人である

●冒頭に大櫛^{つちや}戊辰さんの写経している姿が映る。大櫛さんは当時17歳、生存者として証言している中では唯一成人で、多くの書物を残しており事件を語れる第一人者である。事件のあった8月14日を命日として、毎年慰霊祭が東京目黒の五百羅漢寺で行われており、福岡からの上京が叶わなくなった89歳の大櫛さんは執念の写経を続けている。

●この映画の中で当時の興安総省の最高責任者であった白濱晴澄参与官の長女真砂子さんが語る開戦当日の朝と混乱の中での退避は圧巻である。

多くの記録では関東軍と高級官吏はいち早く退避し、市民を置き去りにしたと書かれている例が多い。しかし白濱さんは違った。総省責任者として市民の退避を見届けた後に、僅かの供を連れて計画通りの行動をとり、後にソ連に連行され

1年後に抑留地で病死してしまう。

家族8人は母親の園さんのもと19歳の真砂子さんを筆頭に弟妹6人を連れて奇跡的に日本への帰還になった。しかし父のいない白濱家では毎日の生活に窮し、体力の無い幼児3人が栄養失調で次々と斃れてしまった。戦乱の中でやっと生き残り、祖国に着いてからも命を救えなかった母の苦しみを想うと戦争の酷さは筆舌に尽くせるものではない。これが最高責任者の運命であったことを訴えている。これも知られざる史実であり映像の中で証言している貴重な記録と言えるであろう。

●次に出て来る伏見恵子^{ふしみ}さんは、この年の4月に新京の錦ヶ丘女学校に入學したばかりだった。12歳、今の中学1年生と同じ年齢である。ソ連の開戦を知って母が興安まで帰ろうと勧めてくれた。家族が一緒の方が良いからと。その時、恵子さんは私も女学生だから学校の指示に従い学徒の役目を果たしたいと母に言うて残ってしまった。その結果が母の行方不明や父の葛根廟事件による死亡につながり、親子の永遠の別れとなった。一人っ子だった自分に両親は全ての愛情を注いでくれた。その母の言葉に従えなかった一瞬が取り返しのない悔いとして今

に残った。

毎年8月14日は葛根廟事件の命日であり、この日は必ず慰霊祭が行われている。この日に合わせて伏見さんは毎年千羽鶴を折って奉納してきた。その1羽1羽に祈りを込めて手折る伏見さんの姿は愛おしい。今年で16回目の千羽鶴である。

●私(大島)が事件に遭遇したのは国民学校4年生だった。家族は6名、この事件で5名が生還できたのは最大人数でほとんどの家族は1名しか生還できなかったか、全滅しているのが実態だ。3、4名が生き残った例もあるが、そのような幸運を得た家族は4所帯くらいしかない。

1300人を率いた浅野隊は隊列が2キロから3キロに延びていた。目標としていた葛根廟寺院を目前にして「休憩!」の号令がかかった。先頭集団が草原に腰を下ろした時、山の稜線に停まっていた戦車隊が動きだし、避難民に一斉射撃を加えたのだ。女、子どもが中心の避難民は戦車を目の前にして、動けない人もいた。荷物は棄てても子どもを置いては走れない。幼児2人、3人を連れた母親は走ることできないまま草原の露と散ってしまった。

我が家では母親と私と6歳の弟と3歳の妹が一緒だった。家を出る時、リヤカー

があつたので沢山の荷物を積んで出たが、途中で何人かの声がかかり荷物を載せて欲しいと頼まれた。山積みになった荷物と引き換えに兄と私はリヤカーから解放されてフリーで歩けるようになった。

しかし、途中でリヤカーはパンクしてしまい荷物は放棄され、一番多く持ち出した荷物が一番少ない立場に代わっていた。幸か不幸かその荷物のせいで我が家はバラバラになり兄と警護にあたる父とは一緒ではなかった。

戦車隊に追われた私たちは無我夢中で草原を走り偶然にあった壕の中に飛び込み戦車の襲撃からは逃れることができた。音が静かになり戦闘が止んだと思ったら、下手の方から3人の兵士が壕の中に下りて来た。私は日本の兵隊が応援に来たものにとこりして兵士の顔を見ていた。ところがそれはソ連の兵隊だった。私の背後からマンドリン銃といわれる連射式銃で固まっていた集団を無差別に銃撃したのだ。その音、砲煙、足音は生きた心地がしなかった。兵士が去った後も戻ってくるかも知れない不安と再度入ってくるかも知れない不安で動けなかった。戦車で蹂躪した揚げ句に兵士が下りてきて銃撃されたのでは浅野隊は全滅したのに等しかった。

父や兄を探しても見当たらない。1キロ2キロの平面を探すことは不可能だ。生き残っている人そのものが見当たらないことで、生き残ったというより取り残されたという気持ちのほうが強かった。朝から何も食べていない上に歩き疲れ、父や兄を探せないことで不安が募るばかりだ。母は私に「どうしようかね」と言葉を送った。もうどうしようも無い。死ぬより道が無いことを私に告げる意味だった。父や兄が見当たらず、食糧もない。女子どもだけで逃げる方法なんて無いだろう。第一行く当てがない。興安街は暴動が起きていると云う。目的の葛根廟にはソ連兵が待ち受けている。広野を行っても結局野垂れ死にするのが見えている。中国人に会っても言葉が分からない。

仲間がいないこと、行くべき目標がないことは絶望を意味している。遂に母は覚悟を決めた。傷ついて動けない在郷軍人の刀を借りて妹美津子の首に刃を当ててしまった。「ごめんね、美津ちゃん、お母さんも直ぐ行くからね」。鮮血がはしり、美津子は死んでしまった。私は後ずさりしてその場から離れた。死にたくない……。

●大櫛戊辰さんの証言は当時独身だったので、家族との行動は無く、避難行動の

編成とか職場関連とか襲われた時の心理状態等を証言している。

●佐藤雅寛さんは父とは一緒ではなく、母と妹と叔母と行動を共にしていた。結局父とは会えず、夕刻になって4人は避難現場から脱出したが、生きる望みを失っていた。地元民の物盗りの姿を見ては恐ろしさが増すばかりだった。

数人の女性達も加わり、人数は増えたがこれからの逃避行をリードしてくれる人はなく、近くに流れている河を見つけて水死の道を選んだ。だが水が浅く、ずぶ濡れになりながらほとんどの人が死に切れなかった。夜道を歩き一発の銃声に驚いて各自が低い姿勢で隠れたのが仇となり、母と妹とその時にはぐれてしまい、そのまま永遠の別れになってしまった。

その後は叔母と行動を共にしたが、地元民の妨害にあい、その時の悔しさから雅寛さんが追って来た中国人に口答えしたことで怒りを買ひ、頭と肩を切りつけられた。国民学校3年生のできごとである。

●高田京子さんは興安街に住んでいた訳ではない。鉄道の終点に当たるアルシャン（阿爾山）から南下して興安街に下車してしまっただけだ。父が経営するホテルが興安街にあり、その従業員と一緒に行動するはずだった。しかし、その後に

来る列車は無く、避難行動するにも他の隊は先行して、結局残った浅野隊に加わるしか道がなかった。下車しなかったらこの事件に遭わなかったのに運命のいたずらだったのかも知れない。

幸い高田さんのグループは大きな被害に至らず、従兄弟1人が弾に当たって犠牲になっただけで助かった。しかしその後の逃避行は難航を極め、半数が途中で行方不明になるなど日本にたどり着いたのは8名だけに減っていた。

残留孤児3人の証言

●石田たか子さんは父が召集されて母子4人の逃避行だった。

たか子さん5歳、弟は3歳、その下に妹1歳が母におんぶされて葛根廟へ向かっていた。たか子さんと弟は馬車に乗せられていた。「戦車が来た時は母も近くにおり、周りがばたばたと倒れた時に、母は1歳の妹を刃物で切り、私たち2人も毒薬を飲ませて自分も口に入れました。私はこれが毒薬と分かり口から出すと弟の口に指を入れて吐き出させました。直ぐに母は息を引きとって死んでしまい、弟と2人がその場に残されました」「私は弟を連れて大人を探して歩きま

した。幸いモンゴル人が私を発見してくれたのです。連れて行かれた場所、ここで待つように言われて待っていると眠くなり、その場に寝込んでしまいました。気がついた時、弟の姿がありません。私は夢中で探しましたが見つかりません。困り果てていたところに大人が来てくれ、私はおんぶされて移動したのです。その時黒い動く物を見つけ、大人の人にそこへ行くよう頼んだらそこには動けなくなつた弟がいました。

モンゴル人のお陰で助けられました。学校に行く時は遠くで大変でした。大きくなると結婚相手を押付けられて苦労しました。暴力を振るう夫で子育ても苦労しました。岡本さんのお世話で日本に帰れて、親戚中が大切にしてくれました。今は中国にも日本にも子ども達がいいます。今が一番幸せです」

●依田照子さんは長女で1年生でした。父は召集されており、母は4人の子どもを連れて逃避行を余儀なくされていた。「戦車が来た時私は走って逃げましたが小さい子を連れた母とはその時から行方が分からなくなりました。」

畑の中に逃げこんで自分は助かったのですが、母の姿はなく、何処を探しても死んだ人ばかりでした。

私は大人の人を探して一緒に連れて行つて下さいと頼みました。その時は可哀想にと云ってくれたのですが、私が眠っている間にいなくなりました。誰もいなくなつて一人ぼっちの私は食べ物を探すためにあちこち歩きまわるうちに親切な中国人に逢い、そこで学校に出して貰うようになりました。

日本との国交回復があつてから、日本の情報を求めて里帰りした時、初めて母が生きて日本に帰つたことを知りました。しかし体力も無く、3人の子どもを失つた悲しみと、父が抑留されて帰っていないことなどあり、居場所を失くして半年ほどで亡くなったそうです。

母も苦労しましたが、今の私は日本人でありながら中国人でもあり、私の娘も中国人であり、日本人なのです。家族の分断もある戦争はとても悲しいものです」

●ウユン（烏雲）日本名立花珠美さんは中国語で証言し日本語訳はテロップで流れる。

「戦争で避難の時父は出張で家を留守にしていました。母は5年生の姉をはじめ1年生の私ほか小さい子がまだ3人居て6人で汽車に乗り込みましたが、出張中の父がこちらに向かつて汽車に乗って来るとの情報があったようです。」

父が居なくて家族6人での行動は母の負担が大変です。そこで列車を降りて父を待つことにしたのです。ところが次ぎの列車は来ないことが分かり、父も興安街まで帰って来ることができませんでした。移動手段を全く絶たれた私たちは最後の避難団である浅野隊に加わるしかなかったのです。

戦車が来た時、姉は走って壕の中に飛び込んだのですが、後から飛び降りて来た人の下敷きになり死んでいました。1人は馬車に乗せられていたのですがどこに行つたのか見つかりません。母は平常心を失い小さい子をナイフで切りました。驚いた私はその場から逃げたのです。でも周りが死人と重傷者ばかりで怖くなり母の所に戻ると、母は苦しそうな顔をして私に何か言いました。

喉から血を流しながら手元の袋から家族の写真と住所の書かれているメモを渡しながら父を探せと言いました。母が息絶えても私はそこから離れることができません。幾日か経ち私は意を決し大人を探しに歩き回りました。橋の上で見つけたくれた人の世話で食事をさせて貰いました。家族5人がこの地で命を失い一人ぼっちの私も後にモンゴル人の父に育てられたのは幸運でした」

●この他に特異な遺族の一人として高知県の青木浩氏が現場付近で父の写真を前にして慰霊しながら父の思い出を語る場面がある。八十路を超えても亡き実父への情愛が胸に迫る。

●藤原作弥氏は父が軍官学校の文官教授であった。軍家族の一員として退避する幸運を得て難を逃れた証言をしている。「二歩間違えば自分もこの事件に巻き込まれていたはずであった。生き残ってこの事件を知った以上、犠牲者への追悼は欠かせない。また一ジャーナリストとしての事件を知らしめる義務もある。大きな事件だけに自分だけが生き残ったといううしろめたさがある」と述べている。

この映画の意味するもの

11人の証言は戦争の実態をよく表しています。葛根廟におけるソ連兵の襲撃場面こそありませんが、こんな殺戮があったという本物の証言です。

写真や書物による史実も参考になりますが、映画は肉声と表情でその場を写し出します。

葛根廟裏の遭難現場にも入って撮影されたものです。

現在の葛根廟にお参りする関係者や地

元の人の祈る場面も本物です。

毎年行われる慰霊祭の様子も入っています。戦後70年を記念して帰国孤児を招き「内蒙古帰国者と語る会」の催しも入っていました。一般の民間人だけでこのような行事を重ねて70年というのも特筆すべき団体でしょう。

国は満洲国に関する史実の自然消滅を待つ姿勢に感じられます。

葛根廟事件は日本国でもロシアでも中国でも表に出ません。些細なことなのでしょうか。

このような史実は風化させず記録して残すべきと考えます。

政治家の方にはこのような戦争悲劇を実際に見て日本の政治に取り組んで欲しいものです。

生き残った人の証言は有り難いが、犠牲者一〇〇〇人の声も何処かで響いて欲しい。ドキュメンタリー映画は一般の映画館で取り上げにくいのが現実です。

スポンサーなし、チラシ・ポスターなし、音楽の力も借りずに完成したとは！娯楽映画のような見どころや感激を味わうことは少ないのですが、歴史を勉強する一端にはなります。

小劇場・公民館・会議室・他の映画との抱き合わせ、戦争を知らしめるイベント

ト会場などで取り上げて頂くのを待つのみです。

最後に「ゆふいん文化・記録映画祭」で第10回松川賞受賞が決定した作品であることを申し添えます。

また国際善隣協会で行われた6月30日の試写会では35人の方が見てくれました。2回目の試写会7月24日には50人の来場者があり多くのコメントが寄せられました。

上映を希望する場合の連絡先

興安街命日会 大島満吉 練馬区西大泉
5-6-8 TEL 03-3924-7764

筆者略歴（おおしま まんきち）

群馬県生まれ。

国民学校4年生の時に葛根廟事件に遭遇。

会社員を経て平成14年父の後を継いで興安街命日会の代表。

『葛根廟事件の証言 草原の惨劇・平和への祈り』564頁の冊子編集。

事件のことを書いた『流れ星のかなた』私製本 上下巻がある。

特集

映画「葛根廟事件の証言」
完成に添えて

映像ディレクター 田上龍一



「善隣」の読者には「葛根廟事件」のことをご存じの方が多いと思う。昭和20（1945）年8月14日、旧満洲（現中国東北部）興安総省興安街（現内モンゴル自治区ウランホト）から避難していた日本人が、ラマ教寺院葛根廟付近で旧ソ連軍の戦車隊に襲撃され、1000人以上が命を落とした事件である。避難



赤星月人「葛根廟事件邦人遭難の図」
（天恩山 五百羅漢寺所蔵）

団は民間人で構成され、犠牲者の多くが女性と子どもたちだった。筆者

は、この事件に遭った生存者、事件で家族を亡くした方、当時興安街に住んでいたが難を逃れて帰国した方らに取材し、インタビューで構成したドキュメンタリー映画「葛根廟事件の証言」を制作した。このたび、創作のきっかけや、映画を通じて訴えたいことなどを寄稿する機会を頂戴した。公開未定の無名の映画に対する厚遇に、国際善隣協会へ感謝申し上げるとともに、制作の経緯を振り返りたい。筆者は現在、テレビ番組制作会社に在籍しながら、インターネットで記事や映像のニュースを配信するメディアに常駐している。映像の仕事に携わるようになったのは、映画監督を志していた学生時代のアルバイトから。学生のときは友人とともに自主映画をつくり、ものをつくる楽しさを経験したが、低予算の商業映画やテレビの報道番組の制作に関わってプ

ロの厳しさを目の当たりにした。数年間離れることもあったが、「いつかは監督に」との思いを胸に、映像業界の周辺をさまよい続け、今に至る。

テレビよりも時間の流れを速く感じるネットメディアで、自分のつくった映像が出ては消え、出ては消え、日々消費されていく。つくっているのがニュースだから当然のことだが、意義のある映像でも一定の期間を逃すとなかなか人の目に触れるのが難しくなる。それがネットメディアの現状だ。「すぐに忘れ去られるものより、後の時代に残るものをつくりたい」、そのような思いは日々強くなっていた。そんなとき、次の記事で葛根廟事件のことを知った。

『葛根廟』悲劇伝える」

犠牲者の70回忌の今夏、大島さん（筆者注・大島満吉・興安街命日会代表）

たちは生存者ら約60人の証言を集めた「葛根廟事件の証言」(新風書房)を出版した。「つらい過去でも後世に伝え、戦争の恐ろしさを訴えたい」との思いからだ。(2014年8月31日付読売新聞より)

この記事では、「大学で史学を専攻したが、取材するまでこの事件を知らず、無知を恥じた」と記者が心情を綴っていた。筆者も同感だった。

そもそも筆者は満洲について何を知っていただろうか。

日露戦争で日本は大陸に「領土」を得た。中国と戦争になった。原爆が落とされた。太平洋戦争に負けた。中学高校の授業で学び、おおまかな近現代史の流れは覚えていても、満洲が授業でどのように扱われたか、余り記憶にない。

筆者が恥ずかしくなったのは、事件のことを知らなかったことだけでなく、満洲から帰還した人たちがどのような苦勞をされてきたか、知ろうともしていなかったことである。豊かな生活を求めて新天地に向かい、敗戦時には身ひとつで日本に戻ってきた。そうした物語はイメージできるものの、満洲という地に住んでいた人たちのことをどこか他人事のようにすら思っていた。

昭和20年当時、満洲には開拓団を含め

て約155万人の日本人が居留していた。ならばソ連侵攻後、155万通りの辛苦があり、地獄があったはずなのに、筆者はそのうちのひとつも知ろうとはしていなかった。

ヒロシマ、ナガサキ、沖縄、東京大空襲。先の戦争で日本が経験した悲劇は、語り手が存在し、それを伝える者がいて、後世の人間は多くを知ることができた。報道だけでなく小説や漫画、映画など様々な形を変えて伝えられることで、教科書で知る以上に人々は悲劇の当事者のことを深く知る。

一方、満洲に関しては、報道、フィクションともに、これまで伝えられる機会が少なかったのではないか。筆者がもっていた「どこか他人事」という感覚は、情報の少なさにも一因があるように思う。筆者のように満洲についてほとんど知らない人はたくさんいるだろう。葛根廟事件に関しては尚更のことである。

戦後70年を経てなお、ほとんど知られていない事実がある。関連書籍に何冊か触れた後、筆者は満洲、事件のことをもっと多くの人に知ってほしいと思うようになった。自分の手で伝えたい。10年、20年先にも残る形で、そして犠牲者の声なき声が聞こえるような形で。それが葛根

廟事件をテーマにドキュメンタリー映画をつくらうと思ったきっかけである。

制作開始は2015年6月末。大島満吉氏が事件関係者ら約20人に呼びかけて実現した訪中旅行への同行取材からだ。ウランホトを中心に観光し、葛根廟も全員が参拝する。

「おそらくこれほどの人数で行くのはこれが最後」

旅程にはないが、大島氏は事件の遭難現場にも向かうという。筆者は当初、関係者の証言だけを収録して映画を制作する計画だったが、このシャッターチャンスを逃すわけにはいかなかった。

成田から瀋陽に渡った後は、夜行列車でウランホトに向かった。戦時中に興安街に向かったときの行程を再度味わう趣向らしい。筆者は中国を訪れるのは初めて。明け方に列車から見える広大な地平線が美しく、朝日の柔らかなうちに無我夢中で撮影した。

訪中団が葛根廟を参拝する日の朝、それに先駆けて大島氏ら一部の参加者とともに事件現場付近を訪ねることができた。大所帯でその付近を移動するのは、中国当局の監視、圧力もあり難しいそうだった。現場付近は夏の緑が鮮やかで、それでいてひっそりとしていた。言葉にできない

静けさが周囲を覆うなか、訪れた人達の話し声だけが響いた。遭難場所を車で探しながら2か所を訪ねたが、現場にいたのは合わせて20分程度。短い時間だった非常に濃密な時を過ごした。

中国取材の後、関係者へのインタビュー撮影を本格的に始めた。登場人物全員に話を聞き終えたのは、2016年の10月だった。

個々の出演者についての詳細は省くが、映画では12組13人が登場し語る。その中のひとり、王桂花（日本名・鈴木春代）氏について触れたい。映画の中で王氏だけは自己紹介がない。満洲へのソ連侵攻に逃げ惑う様子を再現する一人語りから登場する。王氏、すなわち女優の神田さち子さんが演じる中国残留婦人だ。

神田さんのことは、2015年の夏に筆者が訪れた東京・新宿の平和祈念展示資料館で偶然知った。そのとき、彼女がライフワークとして続けている一人芝居「帰ってきたおばあさん」（原作・良永勢伊子、演出・上演台本・杉山義法）を一部上演する催しがあった。間近で見る迫真の演技に魅了された。

「帰ってきたおばあさん」は、念願かかって祖国に一時帰国できた残留婦人の王桂花が、鹿児島島の浜辺で、ボランティア

アに自身の半生を語り始めるところから始まる。満蒙開拓団の一員として中国に渡り、幸せだったのもつかの間、ソ連の侵攻で桂花の人生は激変する…。神田さんの演劇は、葛根廟事件のことを描いているわけではない。しかし、ソ連侵攻時の混乱ぶりや、極限状況で迫られる究極の選択を描いたシーンなど、筆者が取材した方々の話とともに共通点が多いと感じた。映画では、神田さんが2015年11月に東京都大田区で公演した一人芝居を撮影し、劇中劇として使用させていた。1998年の初演以来、神田さんは毎年コンスタントに公演を続けている。今年7月の多摩市公演で192回目の王桂花を演じた。

映画の上映時間は74分だが、5月の完成を前に60分の短尺版をつくった。こちらでは登場人物が2人少ない10組11人が語り部だ。映画祭のコンペティションでは応募条件に上映時間制限を設けているものが多く、その条件に合わせるために短いものを先に完成させた。

この60分版が大分県由布市で毎年開かれている「ゆふいん文化・記録映画祭」で第10回松川賞を受賞した。映像作家・松川八洲雄監督の名を冠した賞で、大変光栄に思う。映画祭が作品を募集する案

内には次のように書かれていた。

（前略）「作り手の思い」がくっきりと見える、完成度の高い（或いは力強い）「映像記録」を全国から募集します。（後略）

映画の完成度や力強さはさておき、とても嬉しいのは、映画をみた人が筆者の「思い」を感じとってくれたことだ。映画祭での上映後は、観客からとても大きな拍手をいただいた。筆者より若い人が葛根廟事件のことを「全く知らないことで驚き、泣いた」と感想を伝えにきてくれた。とても幸せな時間を過ごすことができた。自分のつくった映画が、公民館の大きなスクリーンに映し出された感動は、決して忘れることはないだろう。

この映画の制作を通じて、本当に多くの方々にご協力をいただいた。ある出演者は、筆舌に尽くしがたい体験を声を振り絞るように話してくださった。ある出演者は、記憶の糸をたどるようにして一語一語丁寧に証言してくださった。ある出演者は、何度も涙を流して声を詰まらせた。そして出演していなくても取材に応じてくださった方々、資料を提供してくださった方々。感謝の気持ちは、とても言葉では言い表せない。

この映画は、今後も作品を公募する国

内外の映画祭に出品する予定だ。願わくばどこかの映画館で上映できる機会を得たいが、それが難しければ、自主上映でひとりでも多くの方にみてもらえるように活動していく。読者の方々にもお目にかかる日が来ることを強く望みます。

追記

9月2日、日本記者クラブ主催で映画「葛根廟事件の証言」の上映会が開かれた。映画の出演者であり、時事通信社で記者をされていた藤原弥氏のご尽力によるものだ。公開の決まっていらない映画を紹介しても、みた方は記事にしづらいのではないかと危惧したが、「まずはみてもらうこと」という藤原氏とクラブ事務局からのアドバイスを後押しされ、上映することに。

会場は東京・内幸町にある日本プレスセンターの10階ホール。約360平方メートルの広間に大スクリーンが据え付けられていて、とても贅沢な規模だった。

開場前に映写状態をチェックしているときに、技師が映写室から「こんなものしかないのだが」と、遠慮がちに手のひらサイズのベルを見せてくれた。ボタンを押すと、小さいが上品な音が会場に響いた。上映開始を知らせるために鳴らす

ものだ。司会者がアナウンスするので本来必要ないのだが、少しでも会場の雰囲気盛り上げようと用意してくれたものらしい。その心遣いが嬉しかった。

60人強が来場した。上映前に藤原氏、大島氏と筆者で挨拶した。両氏は、事件については概略に触れるにとどめて詳細は省き、映画のアピールに終始してくださった。両氏が国際善隣協会の岡部滋・常務理事とともに記者クラブで証言集発行の記者会見を開いたのが3年前。筆者はその様子をまとめた映像をインターネットでじっくり見た。そもそも前述の新聞記事は、その記者会見に出席した記者が書いたと推察される。今度は筆者が両氏とともに記者を前にしていることに、不思議な感じがした。

上映後、参加者数人から質問を受けた。「中国、ソ連側の公式見解は?」、「証言以外に証拠は残っていないか?」、「事件のことを知らなかった。なぜこれほどの事件が余り知られていないと思う?」などの問いがあった。やはりジャーナリズムの視点からの質問が多かったように思う。上映会で筆者は、「映画の公開方法は未定だが、なるべく多くの方にみてもらうべく、お力添えを」と来場者にお願した。協力的な方の計らいで、数日も経

たないうちに問い合わせをいただいた。映画のことが少しずつ広まり始めているようだ。

興安街命日会を始め、多くの方が温かい目でこの映画を見守ってくださっている。記者クラブでの上映会を経験して、そのことを実感している。

追記2

映画「葛根廟事件の証言」の60分版が、公益社団法人映像文化製作者連盟（略称・映文連）が主催する『映文連アワード2017』で企画特別賞を受賞することが決まりました。受賞作品上映会は11月28日（火）・29日（水）の両日、ユーロライブ（ユーロスペース内／渋谷区円山町1-5 KINOHALL 2F）で開催されます。拙作はどちらかの日に1回上映される予定です。

自分の作った映画がこんなにも早く劇場でみられるようになるとは、とても感激です。関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

筆者略歴（たのうえ りゅういち）

映像ディレクター。1974年大阪府生まれ。立教大学社会学部卒業。東京都在住。

公開講演会記録

中国を生きる女性たちのいま

—女性の社会進出を支えた「阿姨(アニー)」という存在

ジャーナリスト／アジア・ビズ・フォーラム理事長 姫田小夏



私は上海に15年近く住んでいたが、いまなお東京—上海という2都市間を往復し、上海という都市の変貌を追い続けている。1997年、ちょうど1歳の誕生日を過ぎた娘とともに上海の土を踏んだ。当時は、こんなに「長居」をするつもりはなかったが、いつの間にか上海という地にすっかりなじんでしまった。もちろん、最初は上海の生活における「ないないづくし」には閉口した。今でこそ、「ないものはない」といわれる国際都市・上海だが、それこそ、90年代後半は米・味噌・醤油を日本から担いで行かなければ、ろくな食事もできなかった時代だった。また、不衛生が当たり前だった時代でもあり、そんな中で、おむつも取れない子どもを育て、また自らの「ライター稼業」を継続させるには相当な負荷が伴った。

しかしながら、その生活は明るかった。家の中に、上海出身の「お手伝いさん」が来てからというものの、子育てが苦ではなくなったためだ。負担を分かち合ってくれる存在がもう一人現れたのだから、当然といえば当然だが、たった一人で孤独に子育てに奮闘していた東京の生活（夫はすでに上海に駐在していた）を思うと、子育て経験のある「お手伝いさん」と一緒に、ああでもない、こうでもない」と試行錯誤しながらの子育ては、余裕も生まれ、すべてにポジティブになることができた。

他方、私は、ある上海人との出会いから、上海で日本語雑誌を創刊することになる。娘もまだ手が離れないながらも、こうした一大事業に携われたのも、この

お手伝いさんとの出会いがあったからだとつくづく思う。おかげで、中国人経営者とともに事業を発展させるという、人生においても大変貴重な経験を得ることができた。当時、世界のホットスポットといえば国際資本が集まるこの上海であり、そして「生き馬の目を抜く」と形容される競争激しいこの上海で縦横無尽に取材活動ができたのも、彼女のサポートのおかげだと思っている。

同時に、ひとたび上海の生活者としての視点を持ったとき、日本人の私は「上海の女性の強さ」に釘付けとなった。なぜ彼女たちは男勝りなのか、なぜ彼女たちは経済的に自立しているのか、なぜ彼女たちは仕事と家事を両立できるのか——。日本の女性とはあまりにも違い過ぎるその積極的かつ貪欲な生き方に、日本人と

中国人の決定的な差を感じないではいられなかった。

前置きが長くなったが、この稿では、2000年代の中国の経済発展の一翼を担ったのは、この女性たちであったこと、それには政策的スローガンが裏付けとして存在したこと、さらに突きつめれば、女性が社会進出をし、経済力をつけた背景には、その下支えに「阿姨（アーイー）」または「保姆（バオムー）」と呼ばれる「お手伝いさん」という存在があることを述べてみたい。

外資系企業のエンジンとなった上海の女性たち

80〜90年代、中国が農業国から工業立国化を目指す中で、女性技術者がその一翼を担ったことは、先の講演会でも述べた。例えば、2000年初頭は、中国の縫製工場には日本はじめ世界から多くのオーダーが舞い込んだものだが、縫製工場の経営者には上海人女性も存在した。イタリアのメーカーから注文を一手に引き受けた「パビエリ」という工場は、張さんという女性が一切を仕切っていた。彼女の猛烈な仕事ぶりは、次のような発言からもわかる。

「出産前夜は23時まで会社で働いていた。出産を終えたのは翌日の1時で、2時半にはベッドの上で仕事を始めていた」。

職場復帰は一か月後のことだった。子どもに授乳しながら社内を駆け回る彼女に、社員はみな驚愕したと言う。

対外貿易が急成長したこの時代、上海経済は外資を受け入れ急成長した。このエンジン部分となったのが、上海に進出した日系をはじめとする多くの外資系企業だった。さらに、外資系企業を動かしたのが「外国語のできる上海人女性」（当時、外省人⇨地方出身者はなかなか上海でポジションを得にくかった）と言っても過言ではない。多くの上海人女性が副総経理や経理といった上級ポジションについた。もちろん男性社員もいるが、それ以上に職場では女性のアピアランスが高い。職位を持ち所得も高い上海人女性は、あくまで筆者の肌感覚ではあるが、日本人以上に多いのではないかと感じたものである。

あらゆる消費活動は、実は男性より女性による貢献が高いというのはよく指摘されるところだが、おしゃれに敏感な上海人女性がいたからこそ、上海は「龍の頭」として中国全体の発展を牽引したの

ではないかと実感する。人よりも目立ちたい、いいものを身に着けたい、最新のものを買いたい——そんな、上海人女性独特の「進取の気性」がこの土地を発展させたといえるのかもしれない。

上海も今ではマンションが林立する立派な不動産都市だが、かつては煤煙匂う工場地帯だった。その時代、工場長が縁結び役となって工場労働者同士が結婚するというケースがよくあったが、夫婦共働きは国営時代から当然のこととして行われてきた。その後、市場経済化により比較的自由に職業が選択できるようになった世の中で、上海の女性たちは夫のフトコロを当てにしない経済的に自立した女性として、強い女ぶりをますます発揮するようになった（中には自分の稼ぎがありながらも、さらに夫の財布も支配するという強すぎる女性もいる）。『強い女ぶり』について言及すれば、彼女たちは夫を精神的に支配し、時には骨抜きにする魔力のようなものを持っているのではないかとさえ思う。

中国の工業化を支えた上海の女性たち

上海を「世界の工場」にした陰の立役者に「女性」という存在があったと筆者

は感じている。日本では今でこそ「リケジョ」という言葉が生まれ、理数系に進む女性も増えたが、90年代の日本では「女性が技術力で闘う」などとは考えられないことだった。80年代後半になって、男女雇用機会均等法によって「総合職」という言葉が生まれたが、一般的な女性の雇用は「腰掛入社」とも言われ、結婚までの期間限定というニュアンスが強いものだった。

片や中国では同じ頃、「技術女子」が活躍していた。今年83歳になる宣淑庄さんは、金型設計の技術者である。果たして日本には、83歳の技術者はいるのであるのか。日本の80歳代とえば、それこそ、男性中心の社会から「女、子どもは引込んでいろ」と見下された世代である。とてもじゃないが、男性と対等に現場で働いていたとは考えられない。

一方、宣さんは次のようにコメントしている。

「1949年以降、中国は徹底的に女性解放運動を行いました。現代中国では、女性の教育や就職の機会を重視しています」。

筆者が宣さんに会ったのは15年前だからとくに引退しているだろうが、当時「世界の工場」と国際社会が注目した中

国では、女性が研究・開発・設計分野で活躍することは珍しくなかったのである。汪洪さんは今年48歳になるお母さんだ。彼女と筆者は子どもの通うローカルの幼稚園で知り合った。東京では当時「働くお母さん」は少数派だったが、上海では「専業主婦のお母さん」こそが少数派だった。いや、むしろ皆無に近かった。

汪さんの頭の良さは会話の端々からも感じ取ることができた。何を隠そう、独シーメンズ社の技術者だったのである。理工系を選択したのも親の教育だそうで、「世の中、理工系なら食いばぐれがない」と言い聞かされ、上海科技大学に進んだという。80年代、成績優秀者は男女問わず理工系に進学した時代だったが、その先にある仕事はハードであり、いつも汪さんは忙しそうだった。シニアエンジニアとして、基幹ソフトである工場自動化プログラムの開発を担う彼女は、常にプレッシャーと闘っていた。

「プログラムを完成させなければ工場は動かない、いつも焦りでいっぱい」と話していたのを思い出す。

金型工場経営者といえば、どなたも漏れなく男性を想像するだろう。だが、上海に拠点を置く金型工場の中には女性が経営者だということもある。薛紅さん

(2002年当時48歳)は、科技大学で物理学、光学、機械製図など60〜70科目を学んだという。「技術を身に着ければ待遇や給与面で男女差はない」と大学では精密機械製造を専攻した。その後、同じ大学の同級生だった夫と結婚し、彼女の起業を夫が支えた。

2000年代に入って、中国の造船業界も急成長を遂げた。これもまた女性の活躍を抜きには語れないだろう。葛翠蘭さんは(現在55歳)当時、江南造船集団でコンテナ船などの船体性能を設計していた。文革直後に再スタートした大学受験に挑戦した。当時の合格者は10人にひとりの狭き門だったが「それでも合格者の3分の1が女性だった」と葛さんは振り返る。技術だけではない、葛さんは流暢な日本語も話すことができた。日本と中国の間に生まれる数々のビジネスのつなぎ目となったのが葛さんでもあるのだ。中国が農業国から工業立国化を目指す中で、女性技術者がその一翼を担ったことは、こうした事例からお分かりいただけるだろう。

女性の社会進出を裏付けるスローガン

さて、こんにちに見る女性の社会進出

を支えたのが、かの毛沢東なのである。その有名な語録に「妇女能顶半边天（天の半分は女性が支える）」がある。この言葉が生まれるきっかけとなったのが、1955年に貴州省の民主婦女連合会が「合作社における男女同額報酬の実施」という文章を発表したことだった。これが国家主席の毛沢東の目にとまるや「各地各社でその通りにせよ」と通達したのだ。

中国のインターネットで「百度（バイドゥ）」を検索すると、出てくるのが1950年代の中国における女性の地位だ。そこには、労働力が不足し、家族が口に糊するのもままならなかった時代であるにもかかわらず、女性は外で働きたがらなかったという内容が書かれている。それは、ほかならない「男社員毎日記7分、女社員只記2・5分」という、男女平等な「分工制（労働を点数で評価、のちに集計して金銭や農産物に交換する）」が存在したためだったとある。

このような状況を不服としたのが貴州省の民主婦女連合会であり、彼女たちの意見を重く見た毛沢東は、のちに「妇女能顶半边天」というスローガンを打ち出したとされている。

こうした背景を持つ現代の中国社会で

は、「女性が働くのは当たり前」だという共通認識がある。

逆に、日本の古い映画やドラマを見た中国人は、異口同音に「大男子主義！（亨主関白だ！）」と驚きを隠さない。夫の帰りを三つ指ついて迎える妻や、偉そうに「飯！飯！」と催促する夫を見て、これが日本の男性なのかと愕然とするのである。

確かに近年の日本女性は、自らの人生を謳歌しているようでもあり、男性以上にたくましい優れた人材も少なくはないが、男性の女性に対する考え方は旧態依然としたところが残る。女性を評価する社会的なマインドは、中国の方が日本よりもはるかに進んでいるのである。

データで見るとまだまだ？

一方、データからは意外な事実が判明する。鄧欣氏による「女性与领导力 一个在中国的跨国企业的案例」と題した論文によれば、「中国での女性の労働力としての参加率は1990年以降下降線を描き、その比率は大きく落ちていく」という。確かに90年代以降、中国では大きなパラダイムの転換を迎えた。女性の労働力としての参加率の下降も、いくつか

の思い当たる節がある。

1990年代前半、中国は不動産市場を開放し、多くの投機マネーがここになだれ込んだ。その後、2000年代に入り中国の不動産市場が一般市民を巻き込み、誰もがマネーゲームに熱中するようになる、「額に汗」という労働の精神はいつの間にか忘れ去られるようになった。少なくとも上海では、労働力としての女性の参加が減ってしまった理由について、「不動産バブルにより勤労世帯も大金を手にしてしまった」ことが考えられる。一言でいえば、富裕になったというわけだ。

こうして富裕層の夫人たちは「大事なのは（一人っ子である）わが子」のエリート教育に関心を傾け、現場という一線から退いてしまったのかもしれない。中には専業主婦こそステイタスだと思う女性もいたはずだ。あるいは「中国全体」のデータともなれば、そこには東北部や内陸部の数字も含まれるわけで、いまだ封建社会を引きずる土地があることも想像される。

ちなみに、「ジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index: GGI）」とは各国のジェンダー不平等状況を分析したもののだが、2016年版によれば、中国は

2016年版 ジェンダー・ギャップ指数
(Gender Gap Index : GGI)

順位	国名
1位	アイスランド
2位	フィンランド
3位	ノルウェー
4位	スウェーデン
5位	ルワンダ
6位	アイルランド
7位	フィリピン
8位	スロベニア
9位	ニュージーランド
10位	ニカラグア

(世界経済フォーラムの統計をもとに筆者作成)

99位、日本は111位となっている。国際目線で見れば、中国も女性解放が進んでいないことがわかる。また日本に至っては、中国よりもっとひどい状況になっているというわけだ。

中国全体で見る女性像と、上海という都市で見る女性像には、違いがあるのかもしれない。だが、少なくとも上海は「女性が強い土地柄」であることは間違

いないのだ。否、「強い」を通り越して「凶暴」だとも言われている。地方からの出稼ぎの女性は常に上海人女性を「太凶!」と怖がっている。その逆に、上海を含む江南地帯の男性は「優しすぎる」とも言われている。私の日本人の友人が20年前、上海の土を初めて踏んだその日に目撃したのは、女性が履いていた靴で男性の頭をスコーンと一発お見舞したという喧嘩シーンであった。いやはや、上海の女性は喧嘩も強いのである。

蓄えた富で世界を闊歩する

訪日旅行を楽しむ中国人が増えている。2015年には中国人による「爆買い」も話題となった。同年の観光消費額約3・5兆円のうち約4割が中国人客によるものだが、さらに「中国人女性の買い物」が高い比率を占めたことは想像に難くない。銀聯カードを持って、無制限に買い物を楽しむ姿は「彼女たちは打ち出の小槌でも持っているのか」と思わせるほどで、一家3人で贅沢三昧する姿に、彼らの世帯所得は一体どれほどなのかと頭をひねったものである。

訪日中国人客の旺盛な消費力の根底にあるものを一言でいうなら「ダブルイン



「爆買い」が集中したのは化粧品

カム」である。特に女性については「パートタイム」という非正規労働ではなく、職位をも与えるしっかりとした雇用により、毎月高額の収入を手にかけている。副総経理クラス(年齢でいえば、40歳代前後ならば2万元(1元≒約16円)は下らない。夫と合算すれば最低でも4万元だ。物価高とはいえ、農産物の安い上海ではあつという間に貯蓄が増え、年に3回の海外旅行も当たり前の生活になる。すなわち、訪日旅行の「爆買い」も、その土台には夫婦共働きが存在するのだ。

その夫婦共働きを支えるのは一体誰なのか? それは先に述べたように、阿姨または保姆と呼ばれる「お手伝いさん」の存在なのである。もちろん、自分の親に子どもの面倒をさせるケースも多いが、

いずれにしても、女性を家事や子育てから解放し、社会に送り出す原動力となるのがお手伝いさんなのである。彼女たちが存在する限り、上海の女性たちは社会でその実力をいかななく発揮し、富裕への道をひた走るだろう。

日本の親子関係はウェット？

一方で、日本人は「お手伝いさん」を介在させることにあまり積極的になれないようだ。「中国流」の親子間の距離の取り方に抵抗があるという人も少なくない。日本人の間では「子どもはあくまで母親が面倒をみるものであり、母親のそばに置いておくもの」という觀念が強く、何より夫が「母親が育児をするのは当たり前」と主張し、「お手伝いさんに育児をサポートさせるなどもってのほか」と抵抗を示すケースが多い。（現に筆者も、上海の日本人コミュニティの中では「子どもをお手伝いさんに任せて働くお母さん」という意味で、とても異端的な存在だった）

日本人は子どもとの物理的な距離をあまりに気にし、また母子間の絆をウェットに解釈する向きが強い。筆者自身はドライな性格なので、それについて割り切

ることができた。それは、日本人的な自己犠牲精神や献身的精神に欠けているともいえるかもしれないが、そもそも、私の人生観は「妻であり母である私にも自分の人生がある」というものなので致し方ない。

彼女たちが、自らの収入で誰憚ることなく消費生活を謳歌し、それが回りまわって企業に利益をもたらし、GDPに貢献しているとしたら、「女性解放こそが経済成長の原動力である」のだと評価せずにはいられない。日本も遅まきながらこれに気づき、日本政府も女性の社会進出を加速させるため「待機児童ゼロ」や「女性参画社会」といった目標を掲げるようになった。

他方、「お手伝いさん」がもたらした効果に注目する一方で、デメリットも思考しなければならぬ。上海にはお手伝いさんに育てられた「わがままっ子」は確かに存在する。お手伝いさんは雇われの身であることから、雇用先の子どもに対し「厳しい躾」がなかなかできないためだ。これはおじいちゃん・おばあちゃんが面倒をみるときにも言えることだ。いずれにせよ、お手伝いさんの関与が良かったのか悪かったのか、それは子どもが大人になってからでないとわからない。

また、女性が働くことにより経済が活性化される一方で、その代償となる少子高齢化という末路は避けることができない。だからと言って「家にとどまれ」という発想はあるべき「解」ではない。



女性を解放したので中国は豊かになった



晩年を謳歌する上海の高齢者たち（上海・復興公園にて）

「お手伝いさん」がいたから活躍ができた

一方、「お手伝いさん依存」をすること自体は、そもそも格差社会が前提となる。格差があるからこそ、こうした労働を受け入れる層が存在するのである。こうした社会構造はいずれ淘汰されるのだとすれば、永続的なモデルではないのかもしれない。ただし、2000～201

0年代における上海の女性（中国は広いので敢えて上海に限定する）は、明らかに「お手伝いさん」を踏み台にして社会に羽ばたいたことは事実である。

さて、日本では「イクメン」などの言葉に見るように、これでもういぶん女性中心の社会になったと言える。しかし、それでもまだ十分とは言えない。上海では日本ほどに男女差は問われないが、実力があれば年齢もまた不問にするところが多い。男女も年齢も問わない本当の意味での競争社会が上海とするならば、女性を単なる時間工としてしか見ない風潮が残る日本社会は、真の意味の国際競争に勝てるのか否か疑問が残る。

筆者は、上海でダブルインカム世帯を数多く目にし、その「富裕」ぶりを目の当たりにした。斜陽化する日本経済を救済するには、やはり「優秀な女性」の社会進出があるべきなのだと思う。ただし、「富裕」ぶりは目の当たりにしても、それが本当の意味の幸せなのかはまた別の問題である。これはまた機会を改め思考してみたいと思う。

ちなみに、筆者の娘の子育てについていえば、「阿姨という存在」は家族以外の別の価値観に触れる絶好の体験であり、日本と中国の両方の視点を持つことがで

きた貴重な経験だったと高く評価している。「阿姨」のおかげで、筆者自身は上海社会で経験を積むことができ、自分自身の成長にもつながった。親もまた常に成長し続ける存在であるとするならば、常に社会に接している親の方が子どもに与えられるものがより多くなる可能性があるのではないかと思っている。

（2017年6月29日・公開フォーラム）

筆者略歴（ひめだこなつ）

フリージャーナリスト。アジア・ビズ・フォーラム主宰。1967年東京都生まれ。1997年から上海へ。翌年上海で日本語情報誌を創刊。2008年夏、同誌編集長を退任後、語学留学を経て上海财经大学公共経済管理学院に入学、修士課程（MPA）修了。2000年代中盤からインバウンドをウォッチ、「ダイヤモンド・オンライン」「JBpress」などで最新動向を連載中。著書に『中国で勝てる中小企業の人材戦略』（テン・ブックス）、共著に『バン格拉デシュ成長企業 バン格拉デシュ企業と経営者の素顔』（カナリヤコミュニケーションズ）。今夏、『インバウンドの罠』を時事通信出版局より出版。内外情勢調査会講師。

公開講演会記録

歴史の転換は我々に何をかたりかけるか？

——2015年ノーベル賞作家スヴェトラナ・アレクシエー ヴィツチの最新作『セカンドハンドの時代』をめぐって

駒澤大学名誉教授・会員 杉山 秀子



今年ロシア革命から100年経過、この間、ロシアは驚くべき変貌を遂げた。期せずして米国はトランプ大統領が登場、1917年以来継続してきた世界的主導国の地位を放棄しようとしている。このような歴史的転換点にあたる今日、我々は何を考え、どう行動すべきかは当面の焦眉の課題である。

ここでは、まずあの歴史的ソヴェート政権崩壊の1991年前後の時代的考察と国際関係を元駐米大使であったドブリニン（ドブリネン）の回想録、レーガン政治の機密文書などを参考にしてソヴェート政権崩壊の特異性をさぐり、『セカンドハンドの時代』で扱われた時代的特色を浮き彫り

にし、その時代を生きたソヴェート人の特色と普遍性をさぐっていくことにする。

米・ソの裏面史をかたどったドブリ ニン回想録の中身は？

アナトリー・ドブリニンは1962年のフルシチョフ時代からブレジネフ、アンドロポフ、チエルネンコ、ゴルバチョフの86年までの24年間、駐米ソ連大使をつとめた。1919年モスクワのモジヤイスキー地区の村の金具取り付け工の家庭に生まれる。モスクワ航空学校出身。1944年上級外交学校に入学。45年入党。57年国連事務次長、59年外務省北米

局長。71年ソ連共産党中央委員に選出される。ソ連最高会議議長とゴルバチョフ大統領の顧問を歴任。2010年90歳でモスクワにて死去。

冷戦時代の裏面史を研究するには彼 の書いた700頁にのぼる回想録

Moscow's Ambassador to Six Cold War Presidents (Univ. of Washington Press, 1995) を読破することは必須である。ドブリニンの米との秘密裏チャネルはニクソン時代にはキッシンジャー、レーガン政権の時代はシュルツであった。かつてハリウッドのB級俳優で、良きア

メロカ時代の間層上がりのレーガンはドブリンンに関して気取らない信頼の念を以下のように記している。「彼は献身的共産主義者だが、人間としては彼を好きにならずにはいられない。米ソ両国の民衆もその気にさえなれば、核危機の崖っぷちまで追い詰めた相互不信を減らすことができるであろう」(レーガン回想録)。

ゴルバチョフ登場以前のソヴェート政権の面々に対するアメリカ政権の印象はスターリンのイデオロギーの束縛を受けた硬直化したもので軍産複合体に密接に繋がりを、米に対する防衛力保持に汲々としていた。一方米は1975年のベトナム戦争の敗北により国内経済は疲弊し、社会保障支出の縮小と懲りない軍事費の増大、減税政策は巨額の財政赤字をもたらした。レーガノミクスで小さな政府を標榜したレーガンの願いも潰えた。同時にかすかに残ったケインズの経済への指標は消えて英のサッチャーとならんで小さな政府で利潤は最大限にもたらそうとする新自由主義の道が開かれた。

レーガンの対ソ戦略



レーガン政権下の対ソ戦略の支柱は対ソ秘密工作であり、CIAの使えるあらゆる武器を準備、心理作戦、破壊活動、戦略的策略、サイバー戦争などNSC、国防総省と協調しながら、ソ連の強力なスパイ網を破り、経済を破壊し国家体制を不安定にした。これと同時に1983年の戦略防衛構想SDIはソ連に軍事力競争を扇動する目的に巧みに組織された。

軟弱なゴルバチョフ路線と内部崩壊

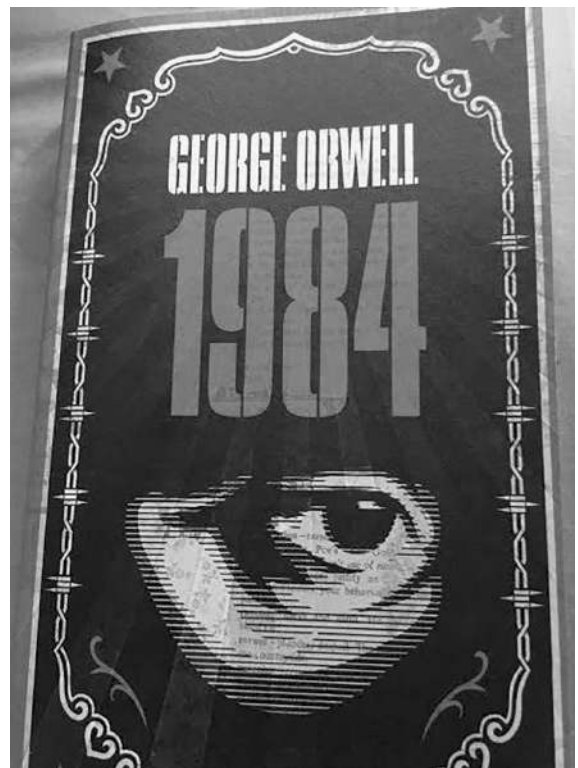
これに対してソ連のほうはレーガンによってしかけられた軍事費増大によってソ連がこの軍拡競争によって破滅したように米政権は思ったようだが、実際はその軍拡競争以上にソ連自身の内的経済上の矛盾によるものとドブリンンは結論付けている。ゴルバチョフは社会主義を固持しつつ、経済構造の劇的変化のために新たな市場システムの導入を模索したが、途半ばで終わった。世界銀行の専門家が指摘しているようにイノベーションの欠如、低調な投資、自給自足的な経済形態の欠如による内部的矛盾が累積されソ連経済は崩壊の道に突き進んだ。ソ連の運命は国内で決められその最後の命運を担ったものがゴルバチョフであった。

た。具体的政策の順位を取り違え、明確なビジョンを持ち合わせなかったゴルバチョフ路線の失脚は多くのソヴェート人を露頭に迷わせた。

歴史の教訓

こうみてくると、軍拡競争によってソ連経済は疲弊したことは事実であるが、それにもまして内部的理由の方が大であったことは想像に難くない。このことは蛇足になるが、現代の疲弊に喘ぐ米経済のありようが1975年のベトナム戦争以降のアメリカの度重なる世界の憲兵としての派兵と軍事費の天井知らずの増加により、中間層の格下げと膨大な赤字による福祉の切り下げをすることにより、米経済が今や青息吐息になっている状況を説明できる。筆者はそう遠くない将来米経済は逼塞し、内部崩壊は避けることはできないとみている。

歴史を俯瞰してみれば、ローマ帝国から大英帝国にいたるまで大国といえる大国はすべて外部的压力よりも内部的圧力によって崩壊しているのである。ソ連の場合内部的要因とはなんであったか。それは紛れもなく世界の市場システムに適合できなかった計画経済の仕組みと硬直



化したマルクス・レーニン・スターリン主義のイデオロギーの政治、社会における適用であった。とりわけ、1936年以降のスターリンの台頭によるソ連政治の掌握は甚大な政治的誤りをソ連社会にもたらした。このスターリニズムの誤りをジョージ・オーウェルはディストピア小説『1984年』（1949年）においてその滑稽な寓意性を遺憾なく証言しているのである。戦争は平和、自由は屈従、無知は力と倒錯した社会を描くことによってオーウェルが生きた同時代人であったスターリンの社会を痛烈に風刺し

た。

現在米社会では、CIAによる国民に対するプライバシーと人権の侵害は深く社会の隅々まで侵され、不審と見れば即拉致、検挙、人権侵害の取り調べの状況には知識人はパニックを起こし、彼らの間ではこの寓意小説『1984年』がベストセラーになっているよう

だ。しかもこの現象は米のみならず、元CIAの職員で現在ロシア滞在を余儀なくされているスノーデンによれば、日本でもマルウェアが仕掛けられ、日本が米国の意のままにならなければ日本の電力、否原子炉もすべてコントロールが喪失されるとのことだ。更に彼によればXKEYSCOREというものが仕掛けられ、Eメールはすべて透視されるとのことだ。日本の横田基地に2年間勤務して日本を愛するスノーデンはこのことで日本人のことを痛く心配しているそうである。このような統制社会が身近に展開されていることも思考・

判断力、想像力がなければオーウェルの描いた『Animal Farm』（1945年）の中の犬、豚と同じ存在に我々はなりうることだ。

我らと同時代人のアレクシエーヴィッチは何を我々に提示しているか

さてアレクシエーヴィッチについては、作品内容の重大さに比して日本ではそれほど大きくとりあげられてはいなかった。日本がフクシマの大惨事を経験して改めて原発事故を受けた人間の苦悩に焦点を当てられてから見直されたという経過がある。これまで同氏の5作品が日本で翻出版されている。

アレクシエーヴィッチはデビュー作『戦争は女の顔をしていない』、『ボタン穴から見た戦争』で第2次世界大戦をとりあげ、対ファシズム戦を戦った英雄としてのロシア人の言説が如何に虚飾にまみれた偽りのものであったかを自ら作品をもって赤裸々に語った。文学の手法としてはジャーナリストとしての氏特有の立場を利用して数万人の人にインタビュした記事を集大成したものである。

戦争に参加した女たちの多くは志願兵として採用され、それまで受けた社会主

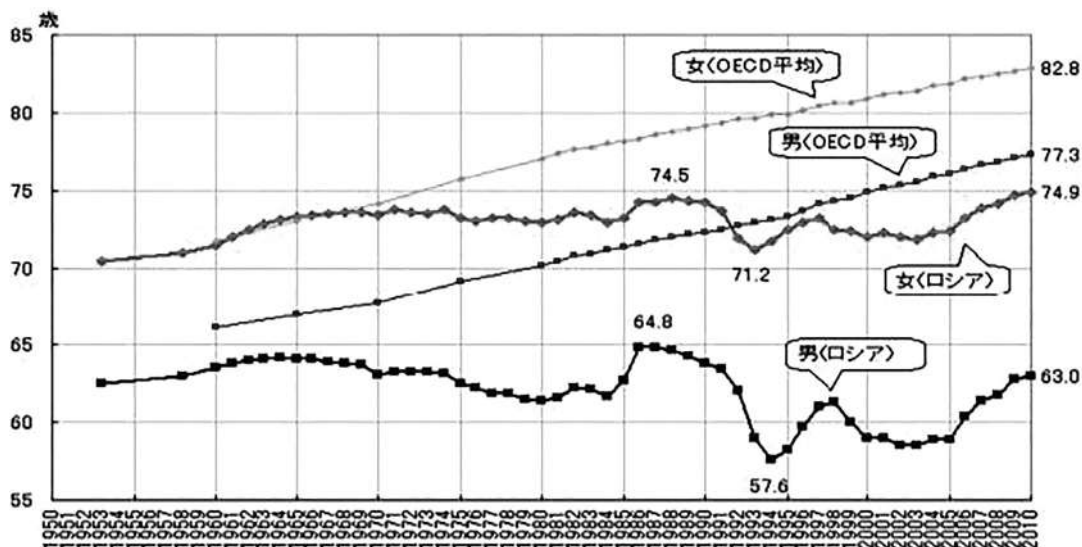
義思想の下に祖国に尽くすという定式通りに動くが、その戦争に参加していく過程で様々な生身の人間としての苦悩が描かれている。それらは大祖国戦争の勝利の結果、顕彰されている兵士達の生きざまが美化されたものではなく、むしろ矛盾と過酷さの中で戦った事実が赤裸々に語られている。多くの女性兵士は称賛を得たが、男性兵士の目からは結婚の対象としては見られず、一生ひっそり独身ですごし、世間からも偏見の眼でみられたことも語られている。

『チエルノブイリの祈り』では民衆の声を採録して、並列的に記載するルポルタージュ形式をとっている。

この書はチエルノブイリ原発爆発事故で、放射性物質による大量の放射線被曝を受けた民衆の生の声である。

目に見えない「放射能」への恐怖と無知に由来する「デマ」や「差別」行動に翻弄される醜い姿が描かれ、それが死と隣り合わせであっても、愛する土地、

ロシアの平均寿命の推移



(注) ロシアの1953年、1958年は、それぞれ、1950～1955年、1955年～1960年の国連推計値である。

(資料) World Bank WDI Online 2012/6.22 (OECD 高所得国平均及びロシア1960年以降)

UN demographic Yearbook 1997 - Historical supplement (ロシア1958年以前)

家畜、家族から離れられない民衆の深い悲しみの姿が話言葉でリアルに描かれている。図表で見る通り、死亡率の高い年は1991、1994年頃だが実際にはその死亡原因の多くは1986年のチェルノブイリの大惨事による被曝が原因だ。

IAEAはひたすら事故を過小評価しようとする。そしてそれに輪をかけて、その実態を隠そうとする旧ソ連の政治体制はまるで同じことをする日本政府と東電関係者の姿そのものを描いていて身につまされる。行政機関に真実を申し立てようとすると、その人物は便槽の中に押し込まれ、他殺体で発見された事例や、告発人があたかも自殺したように見せかけた不審死体が相次いで放置されている事例が後を絶たない。

チェルノブイリの事故時は、党幹部は事故を過小評価しようとし、情報は一たすら隠す。学者は「食べても大丈夫。健康に害はない」と口をそろえて嘘をつく。さらに経済的理由のため、避難区域はほとんど縮小される。高汚染地区なのに民衆に「早く戻って来い」という日本の行政とまったくおなじではないか。そして経済性のため、食物の放射能基準値を引

き上げるということはまさに今日日本で同じことが繰り返されていることがわかる。脳梗塞、心臓病で亡くなる多くの人々、甲状腺を患い、癌になる子どもたち、白血病、脳浮腫になっていく子どもたちが描かれ、罹病の因果関係ははっきりしないと思われてらる子どもたちのあり様は日本の現実そのものと言っても過言ではない。

1997年、上記の衝撃的作品を出版後、アレクシェーヴィッチは2013年まで西欧にくらす。2013年スエーデンで新著『セカンドハンドの時代』を出版。この作品で2013年カナダの女流文学賞エリス・モンロー賞を受賞している。その後、2013年にベラルーシに帰国している。

彼女に少なからぬ影響を与えた作家のB・ブイコフはガゼータ・RU・のインタビューで「カストロフィ、戦争、個人的悲劇を描くとき美辞麗句はあってはならないというのが彼女の私淑する作家、アダモヴィッチ（ファシスト）に対する白ロシア人の戦い―長編《屋根の下の戦い》の著者A・M・アダモヴィッチ1927年―」の考えであり、それを見事に踏襲しているのだ」と述べている。

アレクシェーヴィッチは『セカンドハ

ンドの時代』の中の終章《社会主義は終わった。でも我々は生き残った》でナタリア・イグルーノヴァとの対話により、彼女がアダモヴィッチと出会って初めて自分が創作の中でのべき道が明らかになったと述懐している。自分の耳が聴いた通りのことをつつがなく書くということがあらためて大切であることが氏との邂逅で分かった、と回想している。

アレクシェーヴィッチの聞き語りに おけるリアリズム

ロシア文学には昔から聞き語りのジャンルというものがあり、古くはブイリーナのような形式もあり、一般民衆はたとえ文盲であろうともその聞き語りのフォルクロアを自分達の心のよりどころとして人から人へ語り継いだという。例えばM・ゴリキーの祖母は文盲の吟遊詩人で幼いゴリキーの枕辺で数限りない聞き語りの話をしてくれたという。彼は幼い時から作家としての才能をみにつけることができたのであろう。アレクシェーヴィッチはさらにロシア文学の尊敬してやまないあの大家ドストエーフスキーのリアリズムの手法も取り入れている。その手法は単なる写実的手法ではない。

ものをものとして写實的にリアルに描くというのではなく、『カラマーゾフの兄弟』の中の手法をとって、ヒーローとヒーローをただ写實的に描くのみならず、ヒーローとは別の次元に作家の目があり、その作家とヒーローをさらに高いところから凝視している眼があり、その眼の高みからも全体を俯瞰しているという複雑な様相を呈しているのである。評論家の小林秀雄などはドストエーフスキーのこの手法をよく理解し、高くかっているようである。この手法はロシア文学の評論家のバフチンもよくドストエーフスキーの独特なりアリズムの手法を理論化している。

アレクシエーヴィッチはこのドストエーフスキーのリアリズム手法もちろん意識して作品を書いている。

テープレコーダーを回して、インタビューしながら、インタビュの主人公と手を取り合いながら抱擁し、涙する作家の姿、また数百のインタビュー記事作家的な観点から収録しなおし、問題点を集め、また収録しなおす目くらむような仕事、収録し、全体を見直した時にさらに高みから天の声を聞きなおしてみる作業と複雑な回廊の中をアレクシエーヴィッチは廻り続けているのだ。

巧みな『セカンドハンドの時代』の構成と登場人物たち

『セカンドハンドの時代』の構成ははっきりしている。第一部黙示録による慰めとし、赤いインテリアの十の話とある。赤いイデオロギーというインテリアの中に閉じ込められていた人々の生きざまを詳細に手際よく描く。体制変換というものは70年間人々をマシンがひいて砂にした。しかし人はこのマシンがいとも簡単に壊れるとは思わない。大量の血は流されなかった。1991年無血クーデターで終わったことをアレクシエーヴィッチは言っているのだ。またかつては共産主義同盟の宣誓で自分を捧げるといった人が今は国をぼろくそに言ったりしているさまを描き、ゴルバチョフは共産主義の墓堀人と吐き捨てるようにいう人、また権力の上層部はもちろん無防備だが、上からの破壊はいとも簡単だと権力上層部の脆さを論評する人間もいた。

アフロメートフ元帥の話もあった。彼は自殺の準備をしていた。彼は赤い国旗の下ではなく、三色旗の下で、皇帝の鷲の下で自殺することはそぐわない。

彼は新しいインテリアにはそぐわない

のだ。彼はどこまでもソ連邦の元帥だ。

国家に命を捧げることを誓い、賄賂や不正をこよなく憎み、500ルーブリ以上の外国の贈り物は国庫にすぐ入れてしまう生一本の性格が体制の破壊と同時に自ら生を終わらせることによって清算する。彼女はさらに筆をすすめる。崩壊したのは戦車、ミサイルではなかった。自分達の一番の強み、精神によってだと。彼の取り巻きの官僚たちは次々にエリツインに鞍替えした。まともな人間は時代遅れというレッテルが貼られた。アフロメートフの自殺はついに決行される。最後にアフロメートフ元帥の追悼記事を書いたのは何とあの敵である、アメリカの参謀本部部長のウイリアム・クロウだった。

自分とは考えが違うが、彼を尊敬していた。敬意を表すと書いてあった。(コメルサント1991年9月1日記事より)

このアフロメートフ元帥埋葬後、彼の墓は盗掘されていた。何と人間は貧すれば貪するということだ。これに続くある設計士のインタビューが展開される。「ソヴェート政権は理想的ではなかったが、満足だった。桁はずれの金持ちはいない、しかし貧乏人もホームレスもいなかった。町で瓶を拾ったり、パンあさりなどしなかった。……」別の人の回想「社会主義

政権時代、自分のことではなく、他人のことを考える、自分より弱い人を考える教育を教わる」「穏やかな社会主義が欲しい、人間的な社会主義が欲しい」。別の人は述懐する。「知らない世界を夢見るのは楽しい。でも生きていたのはソ連の現実。ゲームのルールがあって全員がルールに従ってゲームをする。演説する人の言葉は嘘っぱち。自分が嘘を言っているのを皆が知っているのを彼自身がわかっていた」。

女性はいくつインテリアに囲まれていようが、いまが、たくましい。ある女性の言葉「男は自動小銃と戦車しか知らない。女は男よりたくましくなりなけりゃ。ポーランドや中国に出張って行って買ったり、売ったりするんだよ。家も子どもも一手にひき上げるんだ」。

第二部はソ連政権崩壊以後の1991年から2012年までのインタビューによる語り。紙数の関係上多くは省くが、崩壊以前のロシア連邦の15の共和国の民族が放り出されたのである。キルギス、カザフスタン、ウズベキスタン人が職を求めてモスクワになだれ込む。そこに見られるのは暴力と差別、偏見。この世の地獄絵巻が展開される。最後にドストエフスキーのことが引用されているのが印

象的だ。「ロシアは広大だ。ロシア人はパンがなくても生きていける。だが愛がなければ生きていけない」。

第一部と第二部でソヴェート政権崩壊の1991年を挟んで、様々なタイプのソヴェート人の回想と意見が収録されている。中には米のCIAによってソヴェート政権は転覆されたとはっきり体制崩壊の要因を言う人もいた。しかしどの人間もそれぞれの役割を果たして生きてきたのであるが、結局は冒頭にアレクシエーヴィッチが掲載している言葉―共犯者の覚書というロシア語がきわめて比喩的に使われている。

犠牲者と迫害者は同様に唾棄すべきものである。収容所の教訓はそれが墮落において兄弟の関係にあるということだ。ダヴィッド・ルセ『われらが死の日々』いずれにせよ、わたしたちは覚えておかなければならない。世界において悪の勝利に責任あるのは、盲従的に悪をなす人々ではなく、善に仕える精神的に見極めのつく人々であるということだ。

フョードル・スチュブン『起きたことと実現しなかったこと』

冒頭にこのすぐれた哲学的言葉をもつてくることはアレクシエーヴィッチの並々

ならぬ洞察力をうかがい知ることができ。我々は時代の共犯者なんだということ。加担者ではなく、共に罪を犯しうる人間なんだという言葉はこれから大変な時代を生き延びようとする我々に与えられた含蓄ある手厳しい言葉なのだ。

(2017年7月6日・公開フォーラム)

筆者略歴(すぎやま ひでこ)

早大大学院露文学専修 露文学修士。
1974年モスクワ大学、1984年プーシキン大学一か年留学。駒澤大学にて36年間、ロシア語・ロシア文学教授。現在、駒澤大学名誉教授、ユーラシア研究所理事、その他学会情報委員長。著書『もう一つの革命―コロンタイの事業』(学陽書房)、『コロンタイと日本』(新樹社)、『ジェンダーでみるロシア文学のヒロインたち』(親水社)等。

コラム

腰折れ文 三

渡邊澄子（會員）

◆樺太旅行◆

三回続いて協会企画の旅行参

慨無量のこと多く、書きたいことは山ほどあるがそれは無理。特に思いの深かったことのみを記しておきたい。

海沿いを走ることが多かったが、海岸線は美しくまさに絶景。交通量の少なさも驚きの一つ。オリガさんのガイドは行き届いていてありがたかった。琥珀の粒がみつかるという海岸に目を奪われていたら、あそこにアザラシと声をかけられた。ほんとにアザラシ！ アザラシの群に出会えるなんて、これは幸運だったのだろうか。興奮した。

北海道は不漁とのことだが、ここでは鰺・鱈・鮭・烏賊・蟹など豊漁でいくらか蟹も呆れるほど安い。見とれていたら路傍で売っていたおばさんが、たらば蟹の足を御馳走してくれた。おいしい！ 買って帰りたいがダ

メ。鯨と鮭の燻製を買う。研究者仲間達へのお土産にと文房具店を捜してもらったが、やっと見つけた専門店だったのに、品種も品質も日本よりはるかに劣っていて買うメリットなくがっかり。オリガさんと運転手さんのお子さんへのプレゼントを買っただけ。

日本統治下の樺太は王子製紙の独擅場だったのだろうか。戦後七十年も経ちながら、随所に巨大な王子製紙工場跡の残骸が往事の繁栄ぶりを誇示するかのように残されている。搾取されながらも王子製紙で働くことは自慢だったのかもしれないが、敗戦時は随分辛かっただろうと想像してしまう。それにしても、残骸化して朽ちるに任せているのはなぜだろう。土地の所有権

はどうなっているのだらうなどはどうなっているのだらうなど気になってしまふ。街全体が王子製紙で成り立っていたことを示すかのように王子製紙関連の立派な建築物が再利用されている。だが、それどころではなく言葉を失ったのは、随所にみら

れたトーチカや神社の鳥居跡や
手水鉢や狛犬が荒廃してはいる
が残されていたことである。さ
らに息を呑んだのは奉安殿が幾
つも残っていたことだ。奉安殿
がなぜ？ 無数の犠牲者を出し
た戦争の源なのに。雑草に埋まっ
た石段を登った小高い山の上に
あるのは何故？ あの時代を忘
れないため？ それとも大日本
帝国が消滅しきれていないのか。
戦争の出来る国に向かってひた
走る安倍政権の現況に怯えてい
る私は胸が高鳴り夢中で登って、
雨宮さんに呆れられた。

ロシアに行ってきたなんて大袈裟なことを言えるような旅ではなかったが、私にとっては意義ある旅で最高の収穫は、「負」の歴史遺産に真向かえたことだろうか。

◇「腰折れ文」とは拙い文章の意味です。『源氏物語』の「帚木」の巻で使われています。

◇9月号の(一)で女神湖まで往復350^キと書きましたが片道280^キ、往復560^キでした。

会 員 彼 是

花岡事件「存知ですか？」

伊大知重男（会員）

花岡事件の現場に行く気になった契機は協会の矢吹晋氏、石飛仁氏、渡邊澄子氏等の言を得てからである。今回、石飛氏主

影響を受け、この事件の関り方を始め、事件の位置評価に多岐多様の主張と党派運動が存在する。

催の花岡事件慰霊の集い（7月1、2日秋田大館）に参加。大澤武司氏（熊本学園大学）、坂井田友紀子氏（愛知大学）、佐藤建吉氏（元千葉大学）等との再認識会に加わった。

事件の概要は、中国人と鹿島組補導員が居住していた中山寮で中国人達が日頃の飢え、虐待、そして迫り来る死の恐怖に抗して約800名が蜂起し鹿島組補導員4名と中国人1名を殺害し逃走した。これを鎮圧する為、

鹿島組の作業環境は、この死者数が示すように劣悪な労働条件下にあった（給食極端に少なく、満洲帰りの元軍人の補導員等による苛烈なリンチ行為は常態化しており、当初より近隣住民の多数が中国人への虐待リンチの悲惨な光景を目撃していた）。終戦後の

今や、事件当事者の声を聞くことは出来ない。この事件の背景・特徴上、終戦後はこの事件は正に日中間の政治状況、交流事業、賠償請求問題等の変遷に色濃く

中国人収用事業は日中・太平洋戦争下、国内の労働力が極端に不足した為、閣議決定（42年11月・華人労働者内地移入）により開始され44年には捕虜を含

む中国人労働者約4万人の国家動員計画がその背景にある。ここ秋田大館の花岡鉱山地区では花岡川の改修工事等を請負った鹿島組により44年7月以降、現地移入した中国人は986人、内、137人と言う多大な

数の死亡者を彼等への飢え、過酷作業、虐待等により45年7月1日の蜂起前に出していた。鹿島組の作業環境は、この死者数が示すように劣悪な労働条件下にあった（給食極端に少なく、満洲帰りの元軍人の補導員等による苛烈なリンチ行為は常態化しており、当初より近隣住民の多数が中国人への虐待リンチの悲惨な光景を目撃していた）。終戦後の「花岡事件」についての秋田裁判所及び連合国側の裁判の見



「花岡事件」慰霊式



蜂起逃亡虐殺現場

いである）監獄の如き監視下、苛烈な労働強制を敷いた鹿島組の現場での中国人死者は膨大な数になる。これらの犠牲者の遺骨を安置し手厚く供養し丁寧に保管して、戦後遺骨送還事業を行った地元の信正寺3代（達道、達元、達徳氏）の存在は、一宗教家の立ち位置を超え他の宗派、国家、人種をも包含する「慰霊の大意」、世界観をこの事件の全ての関係者に長く静かに語り

かけている、この行為は重い。

花岡事件は日中戦争下、国家事業の負の遺産と言う時代背景がある。その後、敗戦、連合国の占領政策、共産中国誕生、日本の政治党派の混乱、加えて日中友好運動（各派の勢力誇示現場）等の複雑な要因が、この事件の歴史的評価に陰に影響を与えていて、各人により多様な見解を示す事になっている。これとて、日本が先の戦争の総括を未だにしていない事に起因する。大きな負の遺産が今もって眠っている事を気付かされる事件である。歴史の皮肉と言ふべきか、華人労務者内地移入事業の責任者の1人は安倍首相の祖父、岸信介氏（当時、商工大臣）。同氏は当然、花岡鉾山を視察している。

花岡事件の今日の問題として、中国の生存者・犠牲者側が起こした「鹿島」への損害賠償訴訟がある。これには前述の事件の位置付けへの複雑さを現出している（事件の第1次当事者でない者達の賠償交渉への思惑と葛

藤が前面に出た問題となっている）。2000年11月に東京高裁で和解が成立したが、原告側としては内容に不本意であった。だが（日本における）代理人、弁護士は和解に同意した。後、中国紅十字会に信託された5億円の支払い明細は明かされず、この和解の騒動は未だに日中共に「心ある関係者間」で消化不良状態が継続し、事件犠牲者側の更なる怒りを惹起している。

第2次世界大戦中、米国の何十万人に上る日系米人に対する「敵国強制隔離収容所」軟禁拘束事例・モンタナ等、ナチスの「ユダヤ人絶滅収容所」大量虐殺事例・アウシュビッツ等、日本の「約4万人の中国人強制収用」事例・花岡鉾山等。これらは全て「負の根」は同じものを有している。米国の、ドイツの、日本の一般大衆への組み込まれた「狭隘な人種差別、国家蔑視、悪用された恐怖」観がそれである。戦争下、戦時下に免罪符を与えてはいけない。正義



7月1日夕刻、灯明供養式

に対する勇気が自らに試された結果が創出したものである。これらの事例を想起する度に、我々は「恥じらいながら謙虚に理性の呼び声を聞く」必要がある。「人とは何か、生きるとは何か」である。

7月1日夕刻、花岡事件の慰霊式の締めとして信正寺前の旧花岡川で419名の記名灯明供養を始めた際、全く予期せぬ事であったが数匹のホタルが我々の周囲を舞った。その小さな光の暗示は何か。

合掌



編・訳 上松玲子

食品容器とごみ問題

平日昼、北京金融街のとあるビルの前には11時から午後1時まで弁当業者が次々と現れる。社食もなく、食堂も少ないため、このビルの社員のほとんどが弁当を利用してゐるそうだ。食後、弁当容器はごみとなる。

「餓了麼」「美团」「百度」の大手の出前サイトの1日の受注数だけでも控えめに見積もって2千万件、1回の注文で最低2食分の容器とポリ袋を使用すると厚み6cmの容器を積み重ねると

1日で地球とISS間を三往復半する距離となり、A4ほどのポリ袋は168のサッカー場を覆う量が1日で使われる。

重慶市の環境ボランティア団体は前述の3大出前サイトを、重大な環境汚染を引き起こした責任をとるべきとして訴え、北京市第四中级人民法院は今月立件した。自然分解される包材の使用を業者に提唱しても、コストという現実的な壁がある。この訴訟で世の中の意識を変えた

いと、団体の責任者安妮氏。PPの弁当容器は、ペットボトルと違い、油や食べ残しがついているため、オフィスのゴミ集積場でも資源として回収されぬまま、一般ごみと一緒に出される。北京公衆環境研究センターの馬軍主任によれば、一般ごみと混ざると、分別や洗浄コストが割高になり再利用されず焼却され、その結果環境に負荷をかけているという。3年前着工された朝陽ごみ焼却場は設計処理能力1日1800トンに対し稼働した途端に処理すべき地域の

ごみの量が2000トンも増えた。

出前サイト運営者も箸や紙皿不要の選択ができるよう画面を変更、さらに、エコ容器を使う業者には表示をつけるなどの対策を打ち出している。一部のエコ意識の高い業者は、再利用できる容器を用い、常連客には以前持ち帰った容器を洗って持参するように声をかけている。

容器の利用数自体を減らすのは難しいだろう。問題解決の鍵は使い捨て容器の使用比率を減らすことと、再利用できる素材の2次利用率を上げることである。ある専門家は使い捨てと再利用の2層構造の容器の導入を提案し、ある専門家は長期的観点から実行可能なごみ分別システムの構築を主張している。

【新華社】2017年9月21日

北京の大気汚染対策

9月都市管理法執行部門が北京市で露店の鉄板焼等の集中取締りを行った。西城区手帕口西街の晋炊香麵館は店外での違

法営業が市民の生活や休息を妨害していると度々通報があった場所だ。店は最も重い処罰を課せられ営業休止。周囲も片づけられた。豊台区の海戸屯小区の美食街も深夜営業の露店が立ち並び、道を挟んで20mもない民家の住民らを悩ませていたが、一斉取締りと地域の行政による総合整備で、違法建築物が排除され、壁に開けられた穴も埋め戻された。

飲食の露店営業は、『北京市大気汚染防止条例』違反。執行部門は発見即営業停止および器材没収、2千元以上2万元以下の罰金を課すことができる。

今年になってから昨年の1・8倍の1683件の違法行為が処罰され、罰金額は27%増の162万に。苦情件数は34%減り、111か所の重大違法スポットで露店が一扫され、苦情件数も少ない状態が続いている。

まもなく秋冬の大気汚染総合対策行動が始まる。当局は引き続き、露店営業、焚火、工事現場の粉塵、無許可練炭販売など

大気汚染に繋がる違法行為の取締りに力を入れる体勢だ。

一方、運転日週一日返上運動は今年6月にサイトが開設され、登録者は3か月で2万6千人になった。うち6312人の自動車主が、計16万日分の運転自粛を宣言し、1800トンの二酸化炭素の排出が抑制された。削減分はサイトを通じ北京省エネ低炭素工程技术研究院によって市場価格で取引され、取引額は8万5千元を超えた。北京市発展改革委員会の洪副主任によれば当該サイトを通じ毎日1500人が運転返上を申請、20トンの排出削減に繋がっているという。サイト開設1か月後1278人の登録ユーザー対象に行われたアンケートによれば6割が毎週2日以上運転返上を登録しているという。また、抽出調査により208名が虚偽の登録により、登録抹消されている。

微信の北京市自動車二酸化炭素排出削減取引サイトでも排出削減活動に参加できる。削減量に応じお年玉や商品交換や抽選

参加に使えるポイントがもらえ、大気汚染警戒期間にはポイントアップもある。

国家気候変動対応戦略研究国際協力センター排出量市場管理部の張主任は、個人が参加し経済的利益を得られる仕組みは、温室効果ガス排出削減と環境汚染対策市場新メカニズムへの市民参加を後押し、北京の温室効果ガス排出抑制、大気の改善、渋滞の緩和に役立つと述べた。

『北京農報』2017年9月20日

カラオケと高齢者

50歳位から80歳、気が合った者同士グループになり、毎週1回昼11時から夕方6時までカラオケで7時間歌い続けて皆でたったの35元。やや高い店でも59元。各々持ち込んだ果物や軽食を食べ、伝統劇や革命歌を交互に歌う。これが杭州市の汪秀娥さんの楽しみ方だ。

平日昼間の利用者は七割が高年だと、どこのカラオケの店員も言う。広場ダンスで広場を占領した後は、こっそりとカラ

オケの占領も始めたようだ。

9月12日昼11時、あるカラオケ店の10の個室のうち4室に人がいる。いずれも高齢者だ。その日汪さんは仲間12〜13人といた。人が少ないほうという。3、4人が男性であとは女性だ。テーブルには洗った葡萄や棗の入ったポリ袋、ご飯や惣菜、携帯マ

グが隙間なく置かれている。

ある女性は、自分たちは皆あの時代を経てきたので革命歌が一番得意だと言う。汪さんの十八番は『郷愁』と『モスクワに私の愛がある』。2〜3曲歌うが、あとは人が歌うのを聞く。誰もがリラックスした様子で話したり歌ったりしている。

61歳の女性と70歳ほどの男性が2人で歌う『走向復興』は皆の一番のお勧めだ。2人が声を張り上げ歌い出すと、皆が手拍子をし、身体を揺らす。76歳の男性は立ち上がり指揮を始める。その次に花柄のスカートをはいた最年長80歳の王さんが越劇の『我本是金枝玉葉駙馬妻』を歌うと、掛け声や拍手で室内は最

高潮の盛り上がりを迎える。

60歳の陸さんと仲間たちも毎週一回集まり、茶を飲み歌う。チャットグループも作った。仲間は20人ほどで、汪さんのグループより少し若く45歳から65歳。主に楽しむのは陸さん曰く古くも新しくもない、20年以上前の流行歌だ。曲名を忘れてしまうため、陸さんは携帯電話に曲を保存している。

カラオケチェーン店の昼間の価格は室料のみなら一人3元ほど。中高年の客は室料だけで、ほかのものは注文せず、時折、1ポット30〜40元の茶を注文するぐらいだという。

中には持ち込み禁止の店もある。その店では、店員が入っていくと食べ物隠すのはいいて年配の客だそうだが、部屋を使ってくれるので注意しにくいという。その店で年配の客が歌うのは広場ダンスで流れるような曲だそうだ。「若い人とは全然違うが、勢いがあるって、おもしろい」と若い店員は言う。

『錢江晩報』2017年9月21日

陶々俳壇

兼題…「台風」「神」
席題…「善」

台風一過父と息子のハイキング
秋祭善男善女声揃へ
岡和水

冷やかや仏間へ寺の長廊下
冷やかや参道長き善福寺
橋本紅杓

台風や神も佛もなき無惨
やや寒の老いに重ねる衣かな
佐藤若杉

☆ 新米の声幸せを運びけり(特和水) 長野宏太
秋彼岸おはぎの甘き母想ふ(特まもる)(特紅杓) //

○ 神に地に跪きたりゴビ砂漠(特由紀子) 鈴木南山
玉のよなをのこ子生るる台風裡 //

○ 台風過電線に鳥横ならび 戸部まもる
秋冷や体操開始のアナウンス //

秋祭揃ひ輝神酒を干す(特南山) 馬場由紀子
流燈や水面の月が後を追ひ(特宏太) //

☆ 最高点 ○ 由紀子選 (特) 各人の特選

選後評

馬場由紀子

爽頼や君死に急ぐことなけれ 若杉
夏休み明け、中学生高校生の自殺の報道が相次いだ。作者は戦後の混乱期に幾度と命の危機に晒されながらも誇り高く生きぬいて今に至る。そのような作者であるからこそ若者の死を心より悼んでいる。

羽を下げ蜻蛉川辺に吹かれをり 紅杓
まだまだ暑い日は続いているが、日差し和らぎ風の涼しさに、僅かではあるが秋の気配を感じる時がある。作者は川辺にいち早く秋を感じとっている。作者と蜻蛉が静かに風に吹かれている。

秋深く善悪思ふ五十年かな 宏太
この「善悪」はそんなところの「善悪」とは訳が違ふ。青臭い奴らには到底及ぶことできない、深い慈悲と洞察からくる「善悪」なのである。作者は決して裁きを行おうというのではなく、唯世の中を静かに見守っているだけだ。

蛸に背中押されつ磔のぼる 和水
この夏作者は中国地方の寺巡りをされたという。来年は九十歳を迎えられるというが、誰よりも若々しく、積極的にお暮らしである。その力強い作者の背中を押しているのが、儼いものの象徴のような蛸であるのも面白い。夾竹桃崖下の宿陽の強く まもる

崖の下にある宿。鄙の地の寂れた宿が目につく。しかし、俳人はそいつものこそ心惹かれるのだ。瘦せた土地でも美しい花をつける夾竹桃が人を楽しませる。その中には恐ろしい毒が含まれているというのに。
師逝けり善本を山積みのみま 南山
師である研究者の死。恩師の姿はもつとこにも見ることが叶わぬが、遺された本の山の中には師の面影を偲ぶことができる。「善本」と言い切ったところに作者の師への尊敬と思慕を汲み取ることができる。

飯田青蛙さんのことなど 佐藤若杉

小生陶陶会に入会してもう20年はなろうか。その頃飯田青蛙なる人が陶陶会におられ、時々会に顔を出されておった。青蛙さんはもう90を過ぎた頃で、京大を出て満洲にわたり官吏になられた。戦後抑留され帰国後は衆議院参議院の先生になったが、昭和57年自適の身になり短歌俳句に親しみ文学を楽しんだ。私は3、4回位同席したことがあり非常に肩の張らない親しみ易い人だったことを覚えている。句会では席題季題にとられず自分独自の句が多かった。ある時新橋の地下鉄の階段を歯を喰いしばる様に手摺り伝いに上っている姿に感動した覚えがある。現在92歳の小生は私自身と重ね合せ真に忸怩たる思いである。今日、こうした大先輩の学ばんとする実践的態度に想いを致し青蛙さんの句をあげ、みなさんの関心呼びたいと思う(『天の恋 地の恋』より)。

恋裂れ征きし靖国初詣

國恋ひて誓ひし九段花吹雪

老梅の花若々し恋育つ

屈原の故事を恋ふるや端午の日

紫陽花や恋の移ろひとどめ得ず

念入れて賀状に飾る恋心

故郷の家恋ひ来れば夏燕

赤紙に裂れし恋や月見草

テレ隠す忍ぶ恋のサングラス

焼き飛ばす恋人幾万原爆忌

常任委員会報告

◆環境委員会 活動要旨

8月7日(月) 16:00～19:00、5委員出席。当日開催の日本海洋開発研究機構(JAMSTEC)第14回「地球環境シリーズ」講演会の意見交換。

9月4日(月) 14:00～16:00、9委員出席。福島原発事故、エコ問題、水産資源に関する定例話題の討議。

(委員長 牛木久雄)

◆国際交流委員会 活動要旨

9月12日(火) 14:00～開催。さくらサイエンスプランの申請が採択されたとJSTから通知された。初回のさくらサイエンスプランで招待された中国の山東理工大学は、9月26日に大学の幹部4名が再訪日し、JSTと当協会を訪問した。また善隣協会主催の樺太ツアーが8月に実施され、北緯50度で慰霊の行事を行ってきた。ドラマ「大地の子」のモデルの1人になった中国残留孤児、王林起さん著『我在中国75年』の日本語翻訳

を日野委員が依頼された。当事業は国際交流委員会の事業として、今後、委員会でサポートしていくことを決めた。

(委員長 姜晋如)

◆講演委員会 活動要旨

「月に3回も講演会をしているのですか」とよく驚かれる。言外に「身の丈のわりに良く…」との声を聞くような気がすることもある。しかも、質的にレベルの高い講演をキープしているのである。これは、発行する

「善隣」誌への原稿としても必要である。今年1月からは、講演会に並行して、①「日本近現代史」15回の長期講座も行っている。②10月からは、「善隣中国塾」矢吹晋(当会会員、学術顧問)指導も開始される。協会の公益性、会員増も考え、会員外でも熱意有る参加者も迎えた。

(委員長 村瀬 廣)

◆広報委員会 活動要旨

「善隣」誌、9月号・10月号が発刊されました。原稿・写真等のご協力、ありがとうございます。今後とも会員の方にご参加いただき、たくさんの方に

「善隣」誌を読んでいただければと思います。それも広報の一環と考えています。「善隣」誌以外のことはまだ手付かずです。広報の在り方等も「善隣」誌同様、思案中です。幅広くご意見等をお聞かせいただければ幸いです。重ねて、ご協力をお願い申し上げます。

(委員長 原田克子)

◆東北委員会 活動要旨

9月1日14:00～16:00、大日方教授による近現代史講座を実施。講座が昭和時代の大陸侵攻に進んだことで、協会と受講者の身辺に近づいたものとなり、満洲国建国、国内経済窮乏化など国情変化が父母と我が身に及ぶ興味深い時代となった。そのため、受講者からの質問も深く突っ込んだものとなり、先生も一旦持ち帰り宿題とするほど活発であった。更に内容は佳境に入る。

(委員長 戌亥芳秀)

◆財政委員会 活動要旨

9月13日(水) 14:00～16:00開催。委員長を含め9人の委員、監事1人が出席。会館、会員数、決算及び国際善隣会館の

◆原稿・写真など大募集◆

会員の皆様から、原稿・写真などを幅広く募集いたします。

○「みんなの写真館」

表紙および裏表紙の写真や絵画などを募集します。写真についての短いコメントも付けてください。思い出の写真、珍しい写真、力作の写真、なんでもお待ちしております。

○「旅行記」「体験記」「書評」「詩」「小説」など

多様な原稿を募集いたします。

○編集部体制で「善隣」誌の編集に当たります

会員の皆様にご協力いただけよう試みてまいります。原稿の長さ、書き方、原稿送付方法等、お気軽にご相談ください。事務局にお伝えいただければ、追って編集部からご連絡をさせていただきます。(編集部)

カホ会 通信

◆7月度理事会のご報告

●「平成29年7月九州北部豪雨」の被害地に義捐金を送ろうとの提案がなされ、討議の結果実施。募金期間は8・9月の2か月間で、談話室に募金箱を置き、郵便による振り込みも受け付けた。10月初めにはお見舞いの手紙を付けて、現地へお送りする計画。概要は次回の「善隣」誌で報告をします。

●「財政委員会」の今後の運営方針について、担当理事から報告があった。委員会メンバーは、会社経営・エンジニア・コンサルタント等の経験を持つ10名を中心に構成し、開催は9月以降第2水曜日にする。委員長は、矢野一彌会長が担当することを確認した。

◆「樺太紀行・6日間の旅」帰国

8月22・27日、21名で、戦前の国境線である北緯50度まで足を延ばした。昨年の「引揚70周年記念の集い」に、樺太のことをもっと知ろうという話がでたのが発端。成田からユジノサハ

リンスク（ロシア・サハリン州の州都）へ直行便。翌日からマイクロバスで巡回。詳細は、感想文掲載予定。ご期待ください！（写真…表2下）

◆7階談話室に「ボタン式鍵」を取り付け

より安全性を高め、外部の人の出入りするのを防ぐのが目的です。会員にはカギの操作を教えますので、いつでも事務局へお問い合わせください。（事務局長 藤沼弘一）

会員だより

◎新会員

＜正会員＞

高橋昇氏
豊原明氏
柴芸姫氏

同好会だより

＜一石会＞

9月囲碁例会優勝 山本正和氏

＜謡曲会＞

11月21日例会 実施予定曲目

曲目	役	割	地頭
菊慈童	シテ土屋	ワキ澤村	神保
葛城	シテ鶴川	ワキ村瀬	堀野
楊貴妃	シテ神保	ワキ土屋	鶴川

みんなの写真館

土石流からの復興（表紙）

甘肅省の南部に位置する舟曲県は省都蘭州から700kmのところにあり、交通は自動車以外にはない。住民はチベット族が多く、行政的にはチベット族自治州。中央に白竜江が貫通する。雨量は年400・800mm、8月に集中し、しばしば自然災害が起きる。2010年8月8日、この年は雨量が比較的多い中、特大の土石流が発生し、多数の人命・財産が失われ、自然破壊も著しかった。中央政府もこれに重大関心を示し、胡錦濤主席、温家宝総理も現場に足を運んだ。当協会もその生態復興に協力することとなり、日中緑化協力基金の助成を得て、2011年10月・2014年9月の3年間の植林協力を実施した。内外の協力の下に復興が進み、県城は写真に見るように復興し、県城から16kmのところに新市街を建設した。（八島継男）

マンデラビラ・サンパソル（表4上）

殺伐とした世相にあつてはな

おさらに、物言わず心を癒してくれる花は嬉しい。椿のようにあっさりとした花、月下美人は一夜に咲いて終わる、下を向いてしとやかに咲く提灯花、上を向いて咲くリンドウ、咲き終えて鮮やかに散る桜。それぞれ人生模様も同じだが、学名はマンデラビラ。サントリーフラワーが開発したサンパソルは春から秋まで咲き誇る、夕方に花は萎んでも朝にはまたしっかりと回復して花開く。キョウチクトウ科に属し、美しいが毒がある。人間は花の言葉を自分本位でしか聞けない。草花は何を語りかけるのか。（くに）

ボクも甞返りできるかな？（表4下）

夏休みの名古屋港水族館。イルカの優雅な泳ぎに見とれていると、近くに来てゆったりと1回転してみせてくれた。それ以来イルカが大好きになった少年は、いつかイルカと一緒に泳ぐことを夢みている。

（塚原美津子）

2017年11月の行事予定

- 1日(水) 13:00 俳句会
投句の場合は兼題「寝酒、日」及び当季雑詠
- 9日(木) 14:00 ○公開フォーラム
「ロシア極東の社会経済そしてサハリン(樺太)近況」
高橋淳氏(ジェトロ海外調査部欧州ロシアCIS課)
- 10日(金) 11:00 一石会囲碁大会
- 14日(火) 14:00 謡曲会(松木先生稽古日)
- 16日(木) 18:30 ◎公開アジア研究懇話会
「中国展望——党大会を終えて」
西村哲也氏(時事通信社外信部副部長)
- 21日(火) 14:00 謡曲会例会
- 22日(水) 14:00 ○公開東北フォーラム
「回想の大地～70年の時を超え 哈爾濱→葫蘆島1,000km自転車の旅」
丸山巖氏(元 JAL パイロット、哈爾濱からの引揚者)
- 24日(金) 14:00 近現代史講座
- 24日(金) 16:00 ○公開「善隣中国塾」
※参加希望の方は事前に事務局まで申し込みください。
- 27日(月) 15:00 新会員歓迎懇親会
※参加希望の方は事前に事務局まで申し込みください。
- 28日(火) 14:00 謡曲会(松木先生稽古日)
- 28日(火) 15:00 防災訓練
- 30日(木) 17:00 さくらサイエンスプラン 中国医科大学訪日団との交流会
※参加希望の方は事前に事務局まで申し込みください。

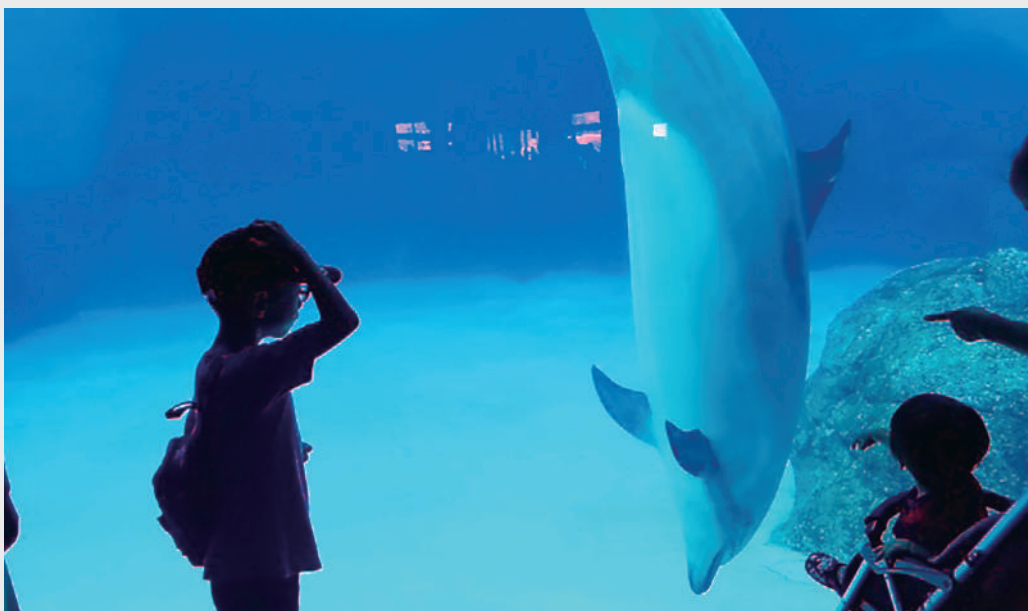
11月の会議予定

2日(木) 15:30	講演委員会	14日(火) 14:00	国際交流委員会
〃 15:30	広報委員会	16日(木) 14:00	理事会(第12回)
6日(月) 14:00	環境委員会	24日(金) 14:00	東北委員会

※会員外一般聴講者の参加費は、◎印:1000円、○印:500円、無印:無料です。

※下線は通常日程に変更あり

みんなの 写真館



INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<http://www.kokusaizenrin.com>

ISSN 0386-0345
二〇一七年（平成二十九年）十一月一日・毎月一日発行

「善隣」第四八五号（通巻七五二）

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）